
夏の湖

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夏の湖

【Nコード】

N1579D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

思い出の場所に旅でやって来た初老の夫婦。そこ彼等が見た温かいものは。ちょっと歳を経た夫婦の愛のお話です。

第一章

夏の湖

夏の保養地の静かな湖のほとり。そこに初老の夫婦がいた。

「ここに来るのも久し振りよね」

「そうだね」

夫は妻の言葉に頷いていた。穏やかな顔で。

水芭蕉の花が咲いていてその香りが辺りを満たしている。霧の中に淡い青色の湖があり二人はその水面を静かに眺めているのであった。

「この前来たのは何時だったかしら」

「もう十年も前だったな」

夫はそう妻に答えた。

「まだ子供達も小さくて」

「そうだったわね」

妻はまだ幼さの残る美しい笑みで夫に答えた。夫はその妻の横でしっかりと彼女の顔を見ている。

「けれど今は」

「あつという間だったな」

妻の顔を見ながら述べた。

「大きくなって。こうして二人で旅行ができるようになって」

「昔は毎年来ていたわよね」

妻は夫にこう言ってきた。

「そうだったわよね。結婚する前から」

「ああ。そうだったな」

夫はその言葉に頷いた。

「昔は。ずっと」

「何時から来なくなったのかしら」

「結婚してから。いや」

夫は自分の記憶を辿った。そうではないと記憶が告げていた。

「子供達ができてからだったな。それから足が遠のいて」

「十年前に一回きりだったわよね」

妻はそう夫に対して答えた。

「その子供達を連れてね。来たわよね」

「そうだった。あの時はどうも」

夫はここで苦笑いを浮かべたのだった。いい思い出と悪い思い出が一緒にある顔であった。見れば二つの感情が複雑に入り混じっている顔であった。

「子供達の相手ばかりしていたな」

「あなたはまだましたわ」

妻はそう夫に告げた。

「私なんて。まともに自分の時間なんてなかったし」

「済まない」

夫はその苦笑いで妻に詫びた。

「あの時は。御前にはかり苦勞をかけたな」

「それでもいい思い出になったわね」

それでも妻は優しい笑みで夫に述べるのだった。

「あの時のことも」

「そうなのか。ならいいが」

「それでね」

そのうえで夫に言うのだった。

「これからは毎年ここに来るのよね」

「俺はそのつもりだよ」

夫は妻の顔と湖を交互に見ながら答えた。霧の中にある湖は何処までも淡い青で澄んでいた。そんな彼の頬を穏やかな風が撫でる。妻の頬もまた。

「御前と一緒に。御前はどうなんだい？」

「私もよ」

妻の答えも決まっていた。にこりと笑って述べるのだった。

「本当はずつと来たかったけれど」

「仕方ないな。子供達がいたから」

それが理由だった。子供がいればどうしても夫婦だけの時間ではなくなる。時として、いや殆どの場合子供が家庭の主役になってしまう。この夫婦も例外ではなく子供達にいい意味でも悪い意味でも振り回されていたのだ。それがようやく終わり今ここにいるというわけである。

「それは」

「その子供達も大きくなって」

だがそれはあくまで小さな子供で。大きくなればまた夫婦の存在が戻って来る。今度は若くはないがそれでも熟した時間がそこにはあるのだ。

「やっと来られるようになって。よかつたわ」

「そうだな。本当に」

「それでね」

妻は穏やかな笑みを夫に向けて声をかけてきた。

「覚えているかしら。全部」

「全部？」

「結婚する前のことも」

それを夫に対して言ってきたのだった。

「覚えているかしら」

「ああ」

夫は妻のその言葉に頷いた。やはり湖と妻の顔を交互に見ながら。見ればそれは妻も同じだった。だが彼女はどちらかというとな夫の方をよく見ていた。

「御前とはじめて出会ったのは」

「ここだったわ」

妻は言う。

「ここで。貴方は一人旅で」

「御前は喫茶店でアルバイトをしていて」

「お給料がよかったから」

妻は昔のことをその目の前に浮かび上がらせながら言葉を出す。

「それだけだったけれど」

「それで俺と出会ったのもここだったよな」

「偶然だったわ」

二人は同時に同じものをその目に見ていた。それは二人にとっては永遠に忘れられない貴く、そして美しい記憶であった。宝石のような。

「休み時間にこの湖を見に来て」

「俺はここで昼飯を食べていたな」

湖の端に置かれているボートを見ながら言う。彼はその時ボートを漕ぎながらその上で昼飯を食べていたのだ。サンドイッチと牛乳の質素な食事を。

「そこで御前をたまたま見て」

「あなたを見て」

妻もその時のことを思い出して語る。

「それがはじまりだったな」

「そうね。声をかけたのはあなただったわね」

「ああ」

彼は答えた。短いがはっきりした声で。

「綺麗だったからな。今と同じで」

「もう」

今の夫の言葉には頬を赤らめさせる。あの時の少女の顔で。

第二章

「口は上手いのはあの時から変わらないわね」

「そんなつもりはないけれどな」

見れば夫も少し笑っていた。

「本当のことを言っただけのつもりだが」

「それが上手いって言うのよ」

今度は妻が苦笑いになった。そうして夫に対して言うのだった。

「お世辞はね。嘘でも本当でもいいのよ」

「そうだったのか」

「そうよ。わかっていると置いていたのに」

「知らなかったな」

とぼけているのか本気なのか。少なくとも彼はこう言うだけだった。

「そんなことは」

「そう。けれどね」

妻はやはり湖と夫の顔を見ながら言葉を続ける。まるでどちらも同じものであるように。

「あの時はそれであなただが好きになったのよ」

「俺は口で得をしたのだな」

「そういうことね。そして私も」

「御前もか」

「あの時。正直迷ったのよ」

彼女にとってははじめての告白であった。実は今までこのことは夫に対しても言うてはいなかったのである。ところが今こうして言うのだ。内心では勇気があるものだったがそれでも二人きりでありその相手だからこそはつきりと言ったのであった。

「どうしようかしらって」

「俺と結婚するかどうか」

「その時あなた言ったじゃない」

穏やかな微笑みで今度は夫だけを見た。そうして言う言葉は。

「御前と一緒にこの湖を一緒に見ていたいって。覚えているかしら」
「今思い出した」

台詞が少しキザになっていた。実は彼は元々キザなのだがここでは特にそうなっていた。これは妻の前で格好よく見せる為の演出でもあった。

「御前の言葉でな」

「それは嘘よね」

嘘なのは妻にもわかった。

「ずっと覚えていたわよね、これは」

「さてな」

こつした場合の常でとぼけた。これも計算のうちであった。

「知らんな」

「そうなの。知らないの」

「全くな。何のことか」

「そうやって大切なことはいつもとぼけて」

咎める口調だが決して悪い気はしていない。むしろそんな夫の反応を見て楽しむ顔になっていた。それは向こうにもわかってはいるがそれでも構わなかった。

「ずるいんだから」

「男は皆そうだ」

夫はそう答えて笑った。

「ずるい。特に女房ができてからな」

「最初からでしょ」

またその言葉に突っ込みを入れる。

「ずるいのは。違うかしら」

「それは自覚している」

今度は素直になる。だがこれも計算のうちである。

「自覚しているが。それでも」

「それでも？」

「なおす気はない」

「別にそれでもいいわ」

妻はそれでもいいとあえて述べてみせる。わかっているから、と顔で言いながら。

「別にね。だってあなたずるいふりをしているだけだし」

「本当だが」

「そのわりに浮気も大事なところでの嘘もなかったわよね」

夫はこれまで浮気をしたことがない。ずっと妻だけだった。妻はそれが嬉しかったのだ。少なくとも自分だけを見ていてくれるからだ。

「だからいいわ。大切な時には正直だったから」

「それでいいのか」

「人間嘘は必要よ」

彼女なりの人生を学んだうえでの言葉であった。人間は時として嘘も必要になる。しかしそれは信頼を冒涇するような嘘ではなく相手を傷つける嘘でもあってはならない。それがわかっていないならばその嘘は必ず露見して己にふりかかる。嘘は難しいものなのだ。

「けれど。私を裏切る嘘じゃなかったから」

「いいんだな」

「いいわ。許してあげる」

「じゃあ俺も許そう」

夫はそれを受けて妻に対して言葉を返した。

「御前の嘘もな」

「有り難う」

妻は夫のその言葉を受けて微笑んだ。微笑みながら湖に顔をやるのだった。彼女も浮気はしたことはないがそれでも夫に嘘をついたことがある。それを今許すというのだ。これもまた信頼を傷つける嘘ではなかったからこそであった。

「そう思うと。私達今まで上手くやってこれたわね」

「そうだな」

これに関しては夫も妻も同じ考えであった。

「色々あったが」

「子供達もできて」

「暫くここに来ることすらできなかつた」

「けれどそれもできるようになつたわ」

妻は今度は完全に湖を見て微笑んでいた。

「毎年。ここに来たいわ」

「二人でか」

「勿論よ」

答えは決まっていた。

「あの頃みたいだね」

「あの頃の俺じゃなくてもか」

「それでもいいわ」

それはもうわかっていることだった。だから返事にも迷いがなかつた。

第三章

「それに私もあの時の私じゃないし」

「そうだな」

これは夫もわかっていて。彼もまた。

「俺も御前も。歳を取った」

「髪も白くなって皺もできたわ」

「ああ」

「それでもね」

だがそれでも彼女はここで言うのだった。

「私は私よ」

「そうなのか」

「ええ、そうよ」

にこりと笑って夫に顔を向けての言葉である。

「あなたもあなたじゃない」

「俺もか」

「そは変わらないと思うけれど」

夫に対して問う。

「それはどうかしら」

「ああ」

夫は妻の言葉に頷くのだった。

「そうだな。その通りだ」

「素直になつたわね」

「俺は何時でも素直だがな。御前が気付かないだけで」

「時々嘘をついても？」

「それとこれとは関係ない」

強引に話を誤魔化すのだった。

「今だつてそうじゃないか。違うか？」

「今はね」

それは彼女も認めるところだった。

「それは認めてあげるわ」

「じゃあそれでいい」

夫は妻の今の言葉で満足するのだった。

「俺は俺なんだからな」

「その二人でずっと一緒にいましょう」

「ここにも来てか」

「ええ。ずっとここに」

また言う。

「一緒にね」

「わかった。ずっと一緒だ」

夫としてではなく一人の人間として。頷くのであった。

「ここにもまた来よう」

「ええ。それにしてもここは」

湖を見る目がさらに優しくなる。その言葉も。

「あの頃のままね」

「俺達と同じだな」

夫はその変わらない湖を自分達に例えるのであった。

「俺達の仲と」

「またそんなこと言って」

お世辞なのはわかってはいるが。それでもよかった。彼女は。

「何も出ないのに」

「それでいい。期待もしていないからな」

「そうなの」

その言葉でまた夫を見る。

「じゃあ何が欲しいの？期待していないのなら」

「御前と一緒にいらればいい」

またキザな言葉を出した。口元が微かに笑っている。

「そうしてここを毎年一緒に見たい。それでいいか」

「いいわ」

妻は笑顔で夫の言葉に応えた。それでももう決まりであった。

「ずつとね。二人で」

「ああ」

二人はようやく互いの顔を見合って笑った。その時二人のところに。水芭蕉の香りが風に誘われて舞い込み彼等を包んだのであった。そうしてこの時もまた美しい思い出にしたのであった。

夏の湖 完

2007・10・22

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1579d/>

夏の湖

2009年3月24日09時22分発行